

佐々木教悟著

『インド・東南  
アジア仏教研究』

Ⅱ 上座部仏教』

『インド・東南  
アジア仏教研究』

Ⅲ インド仏教』

藤 田 宏 達

一

著者の多年にわたる研究成果を集大成した『インド・東南アジア仏教研究』全三巻が完結した。一九八五年四月に第一巻『戒律と僧伽』が公刊されてから、標記第二巻と第三巻とがそれぞれ一年四ヵ月の間隔をおいて遅滞なく刊行され、このほど完成を見るにいたったことは、学界のためにも慶賀にたえぬところである。第一巻については、すでに本誌第四十四号で書評がなされているので、ここでは第二巻と第三巻とを合わせて取り上げることとする。

著者佐々木教悟博士は、人も知るところ、インド及び東南アジアにおける仏教研究で数々の優れた業績をあげてこられた斯学の先達である。その学問的関心、特に古代インドの歴史的社会的方面への視野の広さについては、つとにシルヴァン・レヴィ著『インド文化史——上古よりクシャーナ時代まで——』（一九五八年刊）を故山口益博士と共訳されたことなどにより学界の定評を得てきた。また、東南アジアの仏教に関しては、わが

国における数少ない専門家の一人として貴重な論稿を発表されてきた。このたびの全三巻のシリーズには、著者がこれまで発表されたものの中から、自ら選び出して加筆修正した論稿に加えて、未発表のものも収められているから、これによって著者の主要な業績をほぼ知ることができるといってよい。以下、第二巻と第三巻の内容を紹介しつつ、著者の学績の諸相をうかがってみることにしたい。

二

第二巻『上座部仏教』は、現在タイ国に伝承され、タイ人の日常生活と密接な関係をもって行われている上座部仏教を種々の角度から解明したものである。上座部仏教については、すでに第一巻に「上座部仏教の基盤」と題する章があり、上座部の僧伽と受戒や戒本の問題が取り上げられているが、この第二巻では焦点が専らタイの上座部仏教に向けられている。シリーズのタイトル『インド・東南アジア仏教研究』を文字通りに解するならば、スリランカに端を発しビルマ・タイ・カンボジア・ラオス等の東南アジア諸国に伝播した、いわゆるセイロン上座部仏教の全体が含まれるわけであるが、著者は「はしがき」でこのようにいう。「同じくセイロン上座部仏教を伝承したといっても、民族が異なり、言語が異なり、国情が異なり、風俗習慣が異なり、土着の民間信仰が異なるために、仏教の受容の仕方、伝承の様相にちがいのあることは当然のことである。ましてや、長い歴史の経過するあいだには、スリランカを經由

することなく、インドの北から南から直接に上座部系以外の仏教が伝播したあとかたを見いだす研究もおこなわれているのである。したがって、上座部圏に属する南方諸国の仏教について、その特色ともいへべきものは何か、またいかなる歴史的背景のもとにそのような特色がうみだされることになったのか、という問題を究明することが、当面の課題であるとおもわれる。」

このような問題意識に立って、著者は上座部仏教のなかで、特にタイ仏教を取り上げ、その特色や歴史的背景を究明するのであるが、これは著者が昭和十九年一月より約二カ年にわたってワット・ラーチャプラナに入寺したことが大きな機縁になっているようである。留学僧としての貴重な体験を背景としているだけに、タイ仏教についての著者の論述は説得力があり、われわれは安心して上座部仏教のタイ的形態の詳細を知ることができるのである。

本巻の構成は十章から成り、後に二篇の付録を付しているが、十章のうちの五章(第三・四・六・八・九章)と付録は未発表の論稿であるので、本巻の約半分が今回新たに起稿されたことになる。次に、章を追って、その内容を撮要してみよう。

まず第一章は「タイ族の仏教受容」についての概要が述べられる。中国南部から南下してきたタイ族が最初に接したのはコム(クメール系)仏教であったが、十三世紀にスコータイ王国が樹立して間もなくランカーオン(ランカー系)の仏教が伝来し、ついで十四世紀後半アユタヤー時代になってセイロン上座部系仏教が国内に広く普及したこと、そしてトンブリー時代

を経て、現王朝のラタナコーシン時代に入って僧伽の革新運動が行われたことなどが簡明に説かれる。

第二章「タイにおけるモーン族と仏教」では、このような仏教受容の過程で、特にモーン族の仏教の影響を受けた時期について考察を行う。七世紀のドヴァーラーヴァティイ国を中心にして、モーン族が信奉していた仏教の系統を究明し、それが根本説一切有部を主とするものであり、現在のタイ仏教にも影響を及ぼしている事実を具体的に指摘する。これは、著者によって初めて解明されたものである。

第三章「タイ仏教入門」は、タイ語で書かれた最も簡潔にして権威ある入門的教科書『ナワコーワート』(新参者教誡)の紹介である。著者も指摘しているように、この書の大半はパーリ文原典聖典からの抜萃であるが、その抽出の仕方や編集方法を通して、現在のタイ仏教教理の綱要をうかがい知ることができ。特にこの書の第三篇「キヒ・パティバット」(在家道)は、主に『長部』三一經(Ṭīgālovāḍa-suttanta)に基づきながら、タイ独自の「タン・ブン」供養などにも言及しており、たいへん興味深い。

第四章「比丘戒律の根本」は、右の『ナワコーワート』収載のものに主として基づいた比丘のパーティモック(波羅提木叉)二二七カ条の要約的な紹介である。それはパーリ律の戒本とほとんど同一の内容である。戒本としてはパーリ律では比丘尼戒本三一カ条もあるが、その紹介がないのは、タイを含む上座部仏教諸国では、すでに比丘尼僧伽が消滅したことによるもの

であろう。そのあたりの経緯についても説明がなされてあればよかつたように思う。

第五章は「タイ仏教における業思想」が歴史的に論究される。まず初期仏教（原始仏教）における業報説の基本態を『律蔵』の中に求め、ついで『法句経』及びその註釈の業報説、後代のパーリ仏教や根本説一切有部における輪廻と業の問題を検討したのちに、ドヴァーラヴァティの仏教における業思想が根本説一切有部のそれと深い関わりがあつたことを指摘し、タイ仏教における福業思想を究明する。それは基本的には初期仏教以来の業説に基づくが、「ブン」（福・徳）を作つて現世及び来世の幸福を願う「タン・ブン」の思想ないし儀礼が普及した背景には、現世的・実利的・合理的なものに引かれる民族性ばかりでなく、僧伽をへ世間の無上の福田とする福田思想があることを明らかにしている。

第六章「業処についての考察」は、タイ仏教の教理試験である「ナク・タム」一級の教科書として用いられている止・観の業処について概説する。禅観の対象を論ずる業処論は、パーリ仏教においてのみ発達した実践教理であるが、ブッダゴーサの『清浄道論』において集大成された四十業処説がそのままタイ僧伽で重用されていることが知られる。

第七章は「タイ仏教における誦経」と題し、上座部仏教の呪術的側面を取り上げる。まず、パリッタ（プラ・パリット、護呪）の由来を述べ、次に四世紀中葉スリランカで成立した動行聖典『パーナワーン』（誦誦品）に収められている二十二のバリ

ッタとその誦唱方法を紹介し、また現在タイで広く用いられている『ラーチャ・パリット』（王護呪）の二種（小王護呪と大王護呪）の形態、及びパリッタ的な性質をもつものとして日常依用されている經典や偈頌を紹介する。そして、これらの誦呪作法、諸種の動行書並びにパリッタ誦唱の一部門であるナム・モン（咒水）の誦成というタイ仏教独自の呪法や、これに類似した聖糸圍繞の儀礼等についても述べる。これはタイ仏教に暁達した著者にして始めてなしうる叙述である。

第八章「タイにおける仏教とバラモン教」でも引続いてタイ仏教の呪術的側面が解明される。バラモン教の影響を強く受けた理由を考察し、寺院の仏像の鑄造式にもバラモン僧が司祭者となつてゐる事実を指摘する。また一般民衆の間における「プラ・ビム」と呼ばれる押型仏像や「プラ・クルアング」という護符用の小仏像の普及等について述べ、タイ仏教がバラモン教の信仰・儀礼を換骨奪胎して庶民の社会に生き続けている事情が語られる。

第九章「タイ僧伽の重要行事―布薩―」では、比丘僧伽のみに関するウボンソット（布薩）の形態が、現に僧伽の教科書として使用されている『ウイナイムック』（律入門）に基づいて述べられる。それはパーリ律の規定に準ずるもので、この面ではあくまで伝統的保守的仏教としての面目を保つてゐることが知られる。

最後の第十章は「タイにおいて編纂されたパーリ語の典籍」である。ここでは現在バンコックの国立図書館に蒐集保存され

ている二十四種のパーリ文献がそれぞれ説明を加えて紹介されている。多くは写本であるが、なかには公刊あるいは翻訳されているものもある。このほかジャータカや文典関係などの文献も紹介されており、非常に有益である。

以上で本論が終わるが、なお「付録」二篇が付されている。

その1「大乘仏典のタイ語訳について」は、現代における『般若心経』『阿弥陀経』『維摩経』その他のタイ語訳を紹介したもので興味深い。このうち『阿弥陀経』のタイ語訳者の解説の中で、デンマーク出身の Karl Gjellerup が「Der Pilger Kammanita」中で「極楽世界」に関する物語をあげているのを示しているところがあるが、このことについて評者はもっと詳しく知りたいたいと思う。付録2「参考文献」は邦文・タイ文・欧文の文献を列挙しているが、特にタイ文・欧文のものはわが国ではよく知られていないものが多く、極めて有用である。

### 三

第三卷『インド仏教』は、紀元二世紀前後におけるインドの社会状況と仏教の普及状況に焦点を置いて、ナーガールジュナ（龍樹）とアシュヴァゴーシャ（馬鳴）の出世の意義を考察するとともに、インド仏教の実践道に関する諸教説、浄土教の基本的思想及び正法隱没思想に関する諸論稿を集めたものである。「はしがき」によると、「以上の諸論稿は、インドの仏教全体からいえば、時代的にも、また分野的にも限られた部分のみを扱ったものにすぎないが、インドの仏教全体にも関連を有し

ている意味で、あえて『インド仏教』と名づけることにした」という。著者が最も力を入れた分野の一つと思われるだけに、本巻の内容は充実しており、インド仏教研究の今後の進展に寄与するところ大なるものがあろう。

全体は六章より成るが、主に時代ないし社会的背景を取り上げる前三章と、主に思想・学説を取り上げる後三章が量的にほぼ同じという構成になっている。収録された論稿はこれまでに発表されたものに若干の加筆補正を加えたものというが、こうしてまとめられると、著者のインド仏教に対する関心の広さが浮き彫りにされるようである。

第一章は「龍樹教学の社会的背景」と題して、まず龍樹が活動したとみられる紀元二世紀の中葉から三世紀の中葉にかけての時代のアーンドラ・デーシャと呼ばれた南インドの地域における社会状態や仏教普及の様相について論ずる。アーンドラのシャータヴァーハナ王朝は、ガウタミプトラ・シャータカルニ (ca. 106-130. ただし六頁では 80-104 A. D. とする) のときに非常に強大となったが、この王朝の政治的・経済的状况に触れたのち、これまでに発見された遺跡を中心に仏教の根拠となった地点を推定し、そこで行われていたのが大衆部系諸派であり、大乘の影響を受けていたことを指摘する。このうちアマラーヴァティーの大塔などに拠っていたとみられるチャイティカ（制多山部）等の部派がチャイティヤ（塔廟）を供養しても最上の果を得ることなしと説いたのは、『般若経』の思想の影響であるとする指摘は重要である。ついで、王の阿闍梨耶として

の龍樹について考察を進める。龍樹が止住した土地、伽藍を検討し、龍樹に帰依し外護者であった王はシャーターヴァーハナ王朝第二十七代のヤジュニヤシュリー（ただし六頁ではシュリー・ヤジュニヤ・シャーターカルニとする）と見る説を支持する。また龍樹の死をめぐる伝説等に触れ、王師としての龍樹の実践教学の基本的立場にも論及している。

第二章「シャカ・パフラヴァ時代における仏教の社会的基盤」は、前章で取り扱った年代よりやや遡って、紀元前一〇〇年ころから後七五五年前までのシャカ・パフラヴァ時代の仏教の状況を取り上げる。シャカ族とパフラヴァ族は、ヤヴァナとともに異民族を代表するものとして、インドの文献にしばしば登場するが、著者はシャカ・パフラヴァのインド侵入をめぐるて仏教がどのような関わりを持ったかという問題を究明する。

シャカ族（六三頁以下ではサカ族とする）の行政上の単位の統治者たちはクシャトラバと呼ばれるが、主として西部インドを舞台として活動したクシャトラバについて、その性格並びに仏教への帰依の態度などについても考察を行っている。

第三章「クシャーナ時代におけるインド仏教の性格—アシュヴァゴーシャとその周辺—」は、第一章の南インドに対して、北インドを舞台として展開したクシャーナ時代の仏教の動向を明らかにするために、馬鳴（アシュヴァゴーシャ）の活動と思想、並びにカニシユカ王の帰依と事績について検討する。まず、クシャーナの勢力とカニシユカ王について概観し、馬鳴に関する諸種の伝承を調査しつつ、その活動の輪郭を述べる。ついで、

馬鳴の思想を取り上げ、特に『サウンダラナンド』第十二章において高揚される「信」に注目し、それが大乘の思想に対応することを指摘する。ただし馬鳴の帰属部派についての著者自身の判定は差控えられている。『大莊嚴論経』の作者についても異説があるが、著者はいちおう馬鳴作を認め、この書によって当時の優婆塞の仏教の在り方を推定する。また諸種の伝承から馬鳴が偉大な宗教家であると同時に、優れた芸術的才能の持主であったことも論ずる。一方、カニシユカ王については、その仏教帰依の因縁を究明し、王の能化者としては第一に馬鳴をあげなければならぬ理由を述べる。また王の仏教事績として、仏典の結集と大塔ないし伽藍の建立を取り上げる。これらの叙述は著者の闊達な筆致と相俟ってインド古代史への興味を一段とそそるものである。

第四章「インド仏教の実践教学」は三つの論稿から成り立っている。1「戒学の研究—十善業道を中心にして—」は、インド仏教思想史上において戒律思想が極めて重要な位置を占めていることを、主として十善業道の考察を通して明らかにする。まず解脱戒と増上戒、及び小乘戒と大乘戒とに触れ、ついで初期仏教、部派仏教、大乘経論に一貫して説かれる十善業道について検討する。大乘では十善が菩薩の戒波羅蜜の内容とされたため十善戒としての意味を持つようになるが、著者はかかる大乘の十善業道の意義を『撰大乘論』における増上戒学の中に探り、『十地経』の文によって十善の一々を解説し、さらに菩薩戒本の問題にも論及している。十善業道について、これほどま

った考察は他にないであろう。ただ大乘菩薩戒について『梵網經』『菩薩瓔珞本業經』の所説を紹介されているが、この二經の中國撰述と見なされていることについて、もう少し説明があつてもよかつたように思う。次に、2「大乘菩薩の証入次第について——撰大乘論總綱要分管見——」は、『撰大乘論』『總綱要分』

において説かれる声聞乘等より殊別される大乘の殊勝性、及びそのことと大乘仏教説の主張との關係を討究する。その際、チベット訳のみにある『秘義釈』（秘義分別撰疏）を参照することが多いのは、そのアビダルマ的解釈に注目したためによるようである。次に、3「大乘の仏道体系」における弘誓については、故山口博士が示された「大乘の仏道体系」の中で、仏・菩薩の誓願という課題を取り上げ、それが「摩訶僧那僧涅」「大誓莊嚴」という語で示されること、『無量壽經』における「弘誓」も同じ思想系列にあることを論ずる。これは正鶴を得た見方である。

第五章「淨土教の基本思想についての考察——清淨と莊嚴を中心として——」は、サブタイトルにあるように、清淨と莊嚴とを柱とする淨仏国土の思想が淨土教のもっとも基本的な重要思想であることを論ずる。まず『大智度論』の所説に基づいて、いわゆる「七仏通誠偈」と「緣起法頌」の意味するところを問い尋ね、大乘における清淨道と莊嚴思想の展開をめぐって考究を進める。ここでは『十地經』の初歡喜地における菩薩の十大願中の、淨仏国土を説く第七大願や、漢訳『無量壽經』における「莊嚴淨土清淨之行」の句を特に注目して取り上げる。そして淨仏

国土の具体相として、淨土を説く諸經典には有形的表現が用いられ、やがてととのつた形の淨土の莊嚴功德成就が示されることになったが、その根底には初期仏教以来の「自淨其意」の心清淨思想が一貫して流れていると論ずる。淨仏国土の思想に関する著者のこうした見解には、評者も全面的に賛成である。

最後に第六章として「正法隱没思想管見」が示される。インドにおける法滅思想について、それが何故にコーサンビーを中心とした地に関係づけられているか、いかにして発生したのか、さらにいつ頃起こったものか、という諸点をめぐって考察する。仏陀の在世中においてコーサンビーで発生した僧伽の評論、仏滅後アショーカ王碑文のコーサンビー法勅に見られる破僧伽に関する文、及び原始經典に説かれる正法の隱没説を逐一検討し、法滅思想が僧伽内部における比丘みずからの行持に由来するものであり、外部からの僧伽に対する圧迫という理由に先立つものであると見る。そして『雜阿含經』卷二五に出る法滅記事の時代的背景を考察し、法滅説がいつ頃形成されたかを調べる手がかりを提供する。この法滅思想は仏教の一種の歴史觀として末法思想の興起と関連をもつが、著者はインドにおいて正像末の三時思想の上で末法の語が文献に現われてくるまでの間に、像法の思想がいかに展開したかという問題を取り上げる。阿含を始めとして諸經論に現われる像法中の衆生及び『瑜伽論』卷九九に掲げる二十六種の像似正法を検討し、全体を「像法のときの愚者と智者」としてまとめる著者の論旨は、令法久住のねがいがかめられて感銘深いものがある。

四

上来、第二巻と第三巻の内容を、それぞれの章節にしたがって素描してみたが、これによって知られるように、両巻は上座部仏教とインド仏教における諸問題を多角的に考察して集大成したものであり、著者の幅広い問題意識と学殖の深さを示している。数多くの関係資料や参考文献を読みこなし、信頼すべき解釈を行い、広範な視点から論旨の公正を期している。叙述も平明・懇切であり、単に専門学者ばかりでなく、一般読者にも近づき易い書物になっている。その意味では、両巻の書題に対応して、それぞれ「上座部仏教史」と「インド仏教史」の全体を概観するような章が巻頭に設けられたほうがよかつたかもしれない。

両巻は、いずれも本文が10ポ活字で組まれており、たいへん読み易く、体裁も美麗である。ただ誤植が少し目についたので、いま気づいた限りのものをあげてみる。ただし、評者はタイ語を解さぬので、第二巻のタイ文中のパーリ語の訂正については、かえって原文から逸脱しているかもしれない。そのおそれがあると思われるものには、念のため疑問符を付しておく。

第二巻 一二頁一三行 *saranam* → *sara*° 五〇頁一〇行 *ghaṇṭa* → *ghaṇṭā*° 五二頁六行 *astānga* → *asṭāṅga*° 五四頁一行 ムーラサルヴァステイーヴァーダ……サルヴァーステ……° 六〇頁一行 *Cattāri akaraṇiṇya dhammā* → *Cattāri akaraṇiṇi* (?) or *Cattāro akaraṇiyadhammā* (?)° 六一頁

五行 *Nisaggiyā* → *Nisaggiya* (?)° 六二頁二行 恩を知る人 ↓ 恩を知り恩を感じる人° 六四頁一行 *duccariṭa* → *duccariṭa* (?)° 六五頁三行 *apaṇṇaka-patipada* → ° *patī* (?)° 六八頁五行 *marāṇassati* → *marāṇasati* (?) or *marāṇanussati* (?)° 七七頁五行 *adinnādāna* → *adinnādānā*° 八〇頁二行 *marāṇassati* (前出)° 同一行 *satipatthāna* → *satipatthāna* (?)° 八九頁二行 *Paṇaka* → *Paṇcaka*° 一四四頁五行 *kāmesunicchācāra* → *kāmesu micchā*° 一六八頁三行 *puññakkhetam* → ° *kkhetam*° 一七一頁四行 *paññaṇca* → *paññaṇ ca*° 一七四頁九行 *dasakasiṇi* → *dasa ka*° 一七五頁一三行 *vikkhita-kam* → *vikkhittakam*° 一七六頁一行 *marāṇassati* (前出)° 一七七頁九行 *ekasaṇṇā* → *ekā saṇṇā* (?)° 同一行 *ekava-vatthāna* → *ekam vavathānam* (?)° 一七九頁七行 *magga-maggaṇānadassana* → ° *ṅga*° 一八〇頁九行 *gotrabhūṇāna* → *gotrabhū*° 一八一頁三行 *nibbindatū* → *nibbindatī*° 一九八頁一三行 骨旨 ↓ 骨子° 二〇六頁一五行 パーティモック ↓ パーティモック° 二六四頁一行 Vol. I, 49 → Vol. 49° 同四行 *Sukhāvati lokadhātu* → *Sukhāvati lokadhātuh* (?)° 同八行 *Sukhāvati-lokadhātu* (同七)°

第三巻 六頁二行 *Kaṇha* → *Kaṇṇa*; *Sri-Sātakaṇi* → ° *kaṇṇi*° 同七行 *Dhanyakataka* → ° *kaṭaka*° 同一行 *Sātakaṇi* → *Sātakaṇi*° 同一四行 *Sātakaṇi* → ° *kaṇṇi*° 七頁四行 イディヤ・プラデーデーシム → ……° プラデーシム° 二〇頁八行 ウマトシーブトリーヤ → ウマツィー……° (またはウマーツィー……)°

二二頁一〇行 チャイテイカ↓チャイテイヤ、二五頁一三行  
 Kalinga → Kalinga' 二二頁五行 ācarya → ācārya' 八八頁三  
 行 Kuṣāna → Kuṣāna' 九二頁一〇行 Kāhana → Kālhaṇa;  
 Rājatarāṅgini → tarāṅginī' 一二八頁三行 註(4)を削除。  
 以下註(2)～(3)の番号を1つずつ繰り上げる。同八行 Sakra-  
 devānām → Sakro devānām' 一三二頁一四行 caturvarṣā-  
 taparinvṛtasya → sata°; kuśānavanṣayāḥ → kuśānava-  
 nṣyāḥ' 同一五行 pradēśo → pradēśe; pratiṣṭāpayati → pra-  
 tiṣṭhāpayati' 一三三頁七行 kuśāṇi → kuśā-nāṇi; 同九行  
 kuśāna → kuśāna' 一三六頁九行・一〇一行 註(18)・(19)→  
 (17)・(20) 一五九頁五行 Vol. 11, p. 98' → Vol. 11, p. 352.  
 一六八頁一三行 Mahāvaccagotta-sutta → Mahāvaccā' 一  
 八一頁一三行 karmapathā → karmapathah' 二〇〇頁二行  
 sambhinapralāpāt → sambhinna° 二〇二頁三行 anyāpanna  
 cittaḥ → anyāpannacittah' 二二二頁一五行 prahāṇa-sampad  
 → -sānpad' 二二六頁六行 vimsātitamāḥ → vimsāti° 同  
 一一行 mahāsamāhā samāddha → samāhā-sam° 二四  
 三頁一四行 mahāsamāhasamāddhanām → naddhanām'  
 二四四頁二行 sarvalokārthasamāddhanām → naddhanām'  
 二四五頁一〇行 還相廻回 → ……廻向' 二五一頁八行 Sacotta-

↓ Sacitta- 二五二頁六行 pantaṭha → pantan ca' 二五九頁  
 五行 mahāsamāno → mahāsāmano' 二六一頁五行 vyūha-  
 gūṇa-sampad → -sānpad' 二七七頁一行 Yaśa → Yasa or  
 Yasas' 二八四頁一行 Mahāprajāpati → pati' 二八八頁一三  
 行 Gotāmaputra sri Śātakarni → Gautāmaputra Sri Śātakarni'  
 二九二頁三行・五行・一〇行 カーリ↓カリ

以上、気づいたものを並べてみたが、これらは校正上の些末  
 なミスに過ぎず、もとより両巻の内容の価値をいささかも損ず  
 るものではない。両巻は著者の絶えざる研鑽が見事に結実した  
 ものであり、学界を裨益するばかりでなく、一般読書界にも推  
 奨されるべき良書である。著者にはこのシリーズ全三巻に取め  
 ていない論稿がなお多くあるはずであり、また親鸞の『教行信  
 証』の証巻や化身土巻の安居講本のような日本仏教関係の論稿  
 もある。これらが引続き新たな構想のもとで集大成されること  
 を冀念するのは、ひとり評者のみではないであろう。

第二巻、一九八六年八月、平楽寺書店、  
 A5版、九二九〇+21頁、八〇〇〇円  
 第三巻、一九八七年十二月、平楽寺書店、  
 A5版、九十三〇九+16頁、八三〇〇円